

写真12 1945(昭和20)年7月に夢川に落とされた米軍の250キロ焼弾の処理風景
1973(昭和48)年広報撮影(右は発見された信管)

東京空襲を体験して

長坂 まさ子

昭和18年の春、私が18歳の時でした。

長野の製糸工場^(注1)で働いていた時、知人より東京で人手が足りないので、上京して働いてくれないかとの話がありましたので、母に相談したところ、東京は空襲^(注2)があり死に行く様なものだよと反対されましたが、若い私に深い考えも無く東京の品川にあった軍事工場^(注3)に勤めました。その工場は、軍需工場^(注4)で、戦闘機の部品をつくる仕事で、旋盤^(注5)を操作する、きつい仕事でした。空襲が頻繁にあるので、夜はモンペをはいたままの毎日でした。

防空ごうで1夜を過ごす夜も多くなって来ました。B29が爆弾を落とし、東京の各地で被害が出るようになってきました。

昭和20年3月10日、あの東京大空襲^(注6)の炎の夜がやって来たのです。夕方の東京は、普段と変わる事はありませんでしたが、いつものように警戒警報^(注7)が鳴り、急いで少し離れた空き地の防空ごうへ入りました。

夜中の12時頃より恐ろしい爆撃の熱気でまんじりともせず、一夜を過ごしました。朝になり、高台より街を眺めると、昨日まであった家々がすべて燃え尽きており、恐ろしい光景でした。やっと工場までたどり着きましたが、工場の建物は焼けずに残っていました。

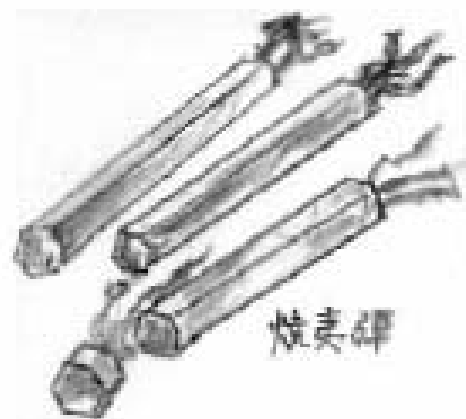
被害は大きく、仕事ができる状態ではありませんでした。戦場の仲間が、同僚達の行方が心配で、みんなで手分けして探しに行きましたが、あちらこちらで死体^(注8)がごろごろ落ちており、正視^(注9)できるものではありませんでした。

どんなにか苦しく、恐ろしかった事でしょう。これが戦争の現実なのです。東京へ行くことを止めた母の気持ちが2年たってやっとわかりました。

20歳の記念日は、焼夷弾^(注10)の洗礼を受けました。当時は大本営^(注11)の機密でわかりませんでした。戦後の公表では、2時間ばかりのあの空襲で、10万人以上の人^(注12)が亡くなったそうです。

これが真実の戦争なのです。

あれから60年の歳月が経ちましたが、世界ではまだまだ戦争が続いています。戦争で犠牲になるのは、いつの世でも女性と子供達です。愚かな戦争だけはこの地球上から根絶し、文化と教育で本当の平和になることを願います。



焼夷弾

(注1) 軍需工場——軍事上、必要なものを作る工場、軍事工場。

(注2) 旋盤——工作機械の1つ。工作物に回転運動を与え、台上の刃物を動かして切削するもの。

(注3) 大本営——戦時の際に設置された天皇の御居所の臨時機関。第二次世界大戦後廃止された。

東京大空襲下の学園生活

吉田 弘

昭和20年、当時私は14歳、東京の本所横綱町に今もある、安田学園の3年生でした。学園は近くに震災祈念堂・安田庭園等があり、緑の多い静かなたたずまいの中にありました。

私の実家は埼玉の草加でしたので、毎日東武電車で通学しておりました。級友の多くは東京の下町の子で当時の貧しい食生活のなかで、みんなやせた身体で、日本は必ず勝つと信じて勉強していました。しかし戦況は日に日に悪化し、マリアナ基地からやってくる敵、B29は日本の空を我が物顔に飛び回り、空襲警報のサイレンが毎日のように鳴っていました。

3月9日・10日は学園の期末試験の最中で、9日の夜は翌日に備えて早めに就寝しましたが、夜中に警報のサイレンに起こされて外に出てみると、南の東京の空が真っ赤に燃えているのです。元気だった父が「これは今までのとは違う。お前の学校もやられたに違いない」と言うのです。しかし本当の事はわかりません。ただひとつ頼りに思うラジオの東武軍情報では、被害の情報等は一切放送しなかったもので、どこがやられたのかもわかりませんでした。

ただ焼け出されて避難してきた人の口から「とにかく下町は全滅でひどいもんだよ」と聞き、心配は募るばかりでした。

空襲の日から数日かで電車が動くようになり、東武線で業平橋^(注1)まで行き、あとはいつもの通学路を歩いて学園に向かいました。

9日の昼間通った時には何事もなく平和に

暮していた家々が、見るも無残な焼け野原に変わっており、道路には焼けたトタンが散乱し、真っ黒焦げの電柱がかたむき、破れた水道管からは水が勢いよく流れておりました。

鹿橋^(注2)のライオン歯磨の工場も焼けてしまい、そのコンクリート塀には〇〇家一家全滅とかの伝言が書かれています。

なによりも犠牲になった人々の死臭がいつまでも漂っている中を、ようやく母校に到着してみると、奇跡的に安田学園は無事に残っていたのです。そして先生方や登校してきた友と無事を喜びあったものの、先生からは、級友のO君が亡くなった事、K君は自分は助かったものの、両親が亡くなって、親類に引き取られること等、悲しい知らせが相次いだうえに、家を焼かれた他の友人も田舎の学校に一時転校する等で、クラスの人数が半分になってしまったのです。

昭和20年3月10日の東京大空襲で、一夜にして推定10万人からの生命が奪われたことはほぼ間違いないと言われております。しかもそのほとんどは母親や娘たち、年寄りや子供達だとの事です。

やがて授業が再開したある日、担任の先生から更に心の痛む話を聞いたのです。それは先生が当直の晩、夜中にどこからとなく大勢の女性のすすり泣きの声が聞こえると言うのです。他の先生方の中にもその体験をされた方がいて、これはきっと、この空襲で犠牲になった多くのお母さんの嘆きの声ではないかと言われました。私達もきっとそうだと思います。皆で黙とうしました。

(注1) 業平橋——東武鉄道伊勢崎線業平橋駅のこと。

(注2) 鹿橋——隅田川にかかる橋。東京都台東区蔵前2丁目。

昭和20年8月終戦。

少女時代後半から思春期へ。この時代に味わった大東亜戦争への生々しい思い出は、残酷で悲しい連続。昭和天皇の終戦宣言を聞いてよりすでに半世紀有余。戦争を知らない子や孫達には一つ一つが言葉では伝えきれない当時の衝撃が去来し、暑き夏の日、寒き冬にと、胸中によぎります。

終戦までの戦争末期、現在の千代田区の我が家も東京大空襲で炎に包まれました。この日母は、2人の弟妹達の学童疎開先の埼玉県行田へ面会日。留守でした。B29の本土飛来です。東京は珍しく大雪の天候で「あれよ、あれよ」という間もなく焼夷弾が上空から降りそそぎまたたく間に、辺り一面火の海です。右手で末の弟の手を引き、左手で、オロオロと泣いている祖母の手を。どちらの方向を見ても火の海の中。熱風は、トタンや大きな木材等も巻き込みながら防空頭巾も何の役にも立ちません。つもった雪の上を多勢の人たちはまだ火が回っていない風下の方へ。熱風に押される様な姿勢で。私は2人の手をしっかり離さず風上へ風上へと歩きました。今を盛りと燃えている建物の横等、やけどのような熱さの中。弟も祖母も熱い。「もう歩けない。」と、泣き叫ぶのを断固無視して。逃げて逃げて途中防空ごうの中で、動こうとしない母子らしい人がうずくまっていました。空は赤一色に染まって上空にはB29が火の海と化した地上の風景を機上から見下ろしながら旋回を続けています。私自身、「今、この場所では死ねない。」と強く思い、泣き騒ぐ2人の

手を離さず風上へ、風上へと歩き続けました。立ち止まったら最後周囲の家の様に炎に包まれてしまう。時間がどのくらい過ぎたのでしょうか。燃える物すべてを焼き尽くし東京大空襲で私は考えて考えて多くの尊い命を奪う戦争はなぜするのか。答えは出ません。それにしても、まだ火の手の回ってない風下の方へ逃げた多くの人達が炎の中で亡くなった事を聞かされました。私達は炎の中を歩き文字通り地獄の時間をくぐり抜けて、翌日、父と母に生きて会うことが出来ました。自分の目で見た戦争の人間が人間を殺す地獄図でした。

私は今、病氣療養中です。そして、晩年期に至り、人生の旅路の来し方を思う時、残酷な戦争の世紀でもありました時代は過去として埋没されようとする感もあります。が、過去の悲しい各人が味わった体験をそのままに押し流すのではなく、だからこそ21世紀は、平和の時代、更に声を出して世界平和論を叫びたい。

待難き世界的詩人のつづられた言葉の中に本当の読書とは、それは良書に触れる事だ。自分1人では、一通りしかつづれない人生の旅路も、良書を読むことにより、たくさんの素晴らしい人生を活字を通して知ることが出来る、と。本当の読書とは、良書を何回も、何回も繰り返し読む事である、と。

晩年期にあって、活字から受ける栄養分の大きい事に、感動もし、感謝している昨今です。30代後半、1枚の紙には必ず表と裏がある事を先輩から教えられました。そ

して、主張と調和の大事なことも聞く事が出来、今にして思えば良き先輩は、宝物のような存在である事によりやく時間をかけて気づきました。若き世代の人達と対話しながら暖かな人間性を最優先し各人が自分らしく生命を躍動させたい。1ヵ月ほど前、テレビで放映されていました北海道の奥尻の地で農業と漁業を営んでられる中年の男性の発言が見事でした。「私達は海からの大いなる恵みを受けて生きていますが、海を大切に、豊かにするために、私は、毎日のように山の様子や木々を見回っています。なぜなら山や木々をしっかりと守らないと、海は絶対豊かにはなれないからです。」と「人間を取り巻く環境すべてに人間たちが暖かな心を、よせること。」「人間と一切の環境は一体化なのです。」との言葉に固面から

発言の重みを五体で感じた1人です。

21世紀、人間を取り巻く一切の物言わぬ環境すべてに、感謝する心を共有したい。

21世紀こそ、人間究極の願望、世界平和論を最高峰の希望として歩み進みたい。

最後に、イギリスのアン王女は、「輝いている世界の王女」として有名ですが、アン王女の行動のすべて、1つ1つが輝きを放ち、王女だから輝いているのではなく、自身の行動をもって、光彩を放ち、王女という、自身の立場を見事に輝かせている、と拝見しました。

ともあれ、今世紀こそ「不戦の世紀」として、子孫に残してあげたい。

1人1人が出来得る事、それは、「自分自身の心の中に、平和というとりでの釜字塔を建てることだ。」と考えています。



忘れられない炎の夜

飯田 綾子

昭和20年、当時私は東京都荏原区（現品川区）に住んでおり、4月24日夜の空襲警報と同時に家から2、3軒先に火の手があがり、これを機に一挙に一面火の海と化してしまった。

父は祖母82歳の身体を男物の帯で結び、先を自分の身体に巻き、私と妹の手をひき「離れてしまっても、必ず我が家へ戻るんだぞ」と言って外へ出たが、周りは火の海。どっちへ行ったら良いのか見当もつかない。父に手を引っぱられるまま走り出した。B29のゴォンゴォンと地面に響くような爆音とサーという焼夷弾の雨、何度地面に伏したり家の軒下に身を寄せ、抱き合って火を避け走り続けた。

1人のおばあさんが路地から走り出してきた父の足にしがみつき「助けて」と父や私達の顔を見上げている。名前は何も知らないが近所のおばあさんだ。父は「ごめんね。この通り年寄りと子供を連れてあるんだ。許してくれね」といって手を振りほども、私達に行くぞと言って走り出した。私にもこのおばあさんを連れて逃げる事は無理だとわかっている。黙って父の後について走った。

激しかった空襲も終わり4人とも真っ黒になりながらも無事だった。家に戻る途中道端でおばあさんは死んでいた。その時の事は今もはっきり覚えている。たとえ100メートルでも連れて逃げていたら助かっていたらどうかと、後悔でいっぱいだった。4人で手を合わせ、その場を立ち去った。父も妹もこのことは一言も触れないで過ごした。

父が病気になる、病院へ見舞いに行った時、病室には誰もいなく父は眠っている様だった。側へ行くと父はぼつんと「綾子、あの時は仕方がなかったんだよね」と言った。私には何の事かすぐ分かった。「そうだよ。おばあさんだってわかってくれていたよ、きっと」と言うと、「うん」とだけうなづいて涙を流していた。父は私以上に苦しみ、30年も心の傷として忘れる事はなかったのだ。

それから1週間後亡くなった。

私も75歳になり、58年経ってもあの時のことは目に焼きついている。B29の爆音と焼夷弾のサーと落ちてくる音、今でも夢を見ることがある。私が死んだ時、やっと私にとって終戦なのかもしれない。

戦争に大義も正義も無い。絶対にさげねばならないと思う。



水戸の大空襲に想う

山崎 エイ子

昭和20年8月2日夜、茨城県水戸市の大空襲、当時私は20歳で、勝田駅に勤めていました。

この大空襲で、家も焼かれて命からがら爆撃の中を逃げまどい、歩いて那珂川の鉄橋にたどりついた時、気がつくやうな頭の中、洋服にシラミがいっぱい取り付かれ、大変な思いをしました。日立、勝田には当時軍事工場があり、また、阿字ヶ浦には航空隊があり、これらを標的に敵の戦艦からの艦砲射撃を受け、多大な被害を受け、この爆撃が一番恐ろしい思い出です。

どこへ飛んでくるかわからない砲弾、水戸の大空襲の状況を離れた山の上から見ていましたが、敵機が1機で爆撃すると、数百軒が一変に燃え上がり、一瞬のうちに焼失し、朝には真っ黒になった遺体が多く並んでいました。今でも目に焼きついています。

終戦2年後機会があり、横須賀の軍港に米空母の艦内を見る事があり、米国艦船の充実された設備に驚くばかりでした。

昭和22年当時の艦船で内部にエスカレーターから映画館、遊技場、ボーリング場、バー等があり、私もこれほど文化技術が進んだ国に戦争で勝つわけが無いと痛感しました。また、グアム島に行った時にも、戦後50年以上経つ現在も艦船の残骸がそのままでありました。

3年前にニュージーランドに行く機会があり、同国の女性首相は、世界に不戦国と発表している、有名な観光国です。

日常の生活システムにもゆとりの時間をとり、午後4時30分になると、店はすべてシ

ャッターを閉め、銀行、オフィス、スーパーで働いている人々は帰宅し、家族との時間をもった生活をしていました。日本との生活の違いに驚きを感じました。

戦争は、人間の生活を狂わせ、食べ物から生活用品全部が無くなり、住まいまで焼かれ、生きる事ができなくなる事が戦争だと思います。その苦しさよりも、悲惨な広島・長崎の被害者、また外地より引き揚げられた方々のご苦勞を思うと、こうして1日1日を大切に生きてこられた幸せをかみしめて、これからの人生を人のため、世のために生きてまいります。

戦争を乗り越えた人間として、絶対に争ったり恨んだりせず、人を大切に、何事にも負けない勇気で、人生を邁進してまいります。

第二次大戦の頃は、新潟県長岡市に住んでおりました。

当時は米農家も米を供出させられるので配給米を食べ、金属が不足しているからと仏具まで供出。飛行機の燃料用にと、松の根を割って松根油(注1)を作ったり、敵の攻撃に備えての竹槍訓練。アメリカは原子爆弾を作っていた時代に、なんと日本は遅れていたのでしょうか。それも終戦になってから分かった事でした。

昭和20年8月1日夜、長岡にも空襲がありました。B29が来たと思ったその時、ドーンとすごい音。

私のところから8キロほど離れていましたが、炎で、空が赤く見えました。その夏は雨が降らず空襲の火は、なかなか消えませんでした。20日も過ぎてから熱気で蔵が破裂してまた燃え出すこともありました。子供を亡くす親、親を亡くす子供、それはそれは大変でした。

15日の終戦を迎えても、雪解けが遅くて作物の出来が悪く、食糧を含めて、何もかもが不足していました。

母は塩を作るため、寺泊まで海水を汲みに行ったりしていました。私は身体が弱く、思う様に手伝いが出来ませんでした。

こんな恐ろしい戦争など二度と起こしてはなりません。

上に立つ人にしっかりしてもらいたい。今は何でも手に入り、便利すぎて、後が怖いです。

(注1) 松根油——松の根を乾燥して沸かした油状物質。揮発性のある無色の液体。現在はほとんど用いられない。